

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十年一月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十四卷第九号（通巻第一六五号）

鈴



ぐるっけ

新春号

俳句雑誌

GLOCKE

第165号

1. 2008

謹賀新年

代替り

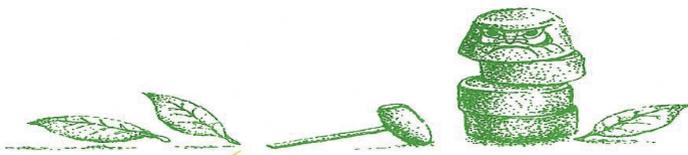
品川 鈴子

文音<sup>ぶんいん</sup>の付け句留めて年を越す

冬至風呂句座を早目に切り上げて

愚陀佛庵跡は師走の駐車場

顔見世の仇討ち遂ぐる柝の出番



顔見世の袖に屈まり柀の翁

祖父とそつくり顔見世の代替り

顔見世の席に亡夫の身じろぎぬ

鴨川の磧地蔵にサンタ帽

歌舞伎座の脇径巡るクリスマス

クリスマス来るたび母の誕生日



# 玉鈴吟

大阪 今谷 脩

降り立てば明石しごせん鯛雲  
病み抜けてまた家にもどる藤袴  
天皇の御名誦すわが文化の日  
黄落や安土に残る大手道  
粧ふや大織冠の古墳山

香川 齋部 千里

岩群に咲く曼珠沙華岩に染む  
ロープウエー霧つめ込みて昇りゆく  
山眠る満水ダムをふとこころに  
祭獅子後退をして舞ひ納む  
伊予街道ゆけば山みな青蜜柑

兵庫 浮田 胤子

枯れしかと思ひし蘭に花芽出づ  
ガレーヂに散り敷く紅葉江戸小紋  
黄落の日がさし部屋が金色に  
新しきりんごの名前「しなのスイート」  
毎朝を茶粥で育ちし幼き日

# 吟

兵庫 馬越 幸子

野球帽うしろ被りの根釣りかな  
西へ発つ秋天遮ぎるものなくて  
天高し魚呑みこみし鷺の首  
造船所廃れドックに鯛跳ねる  
葉研堀萍紅葉あるばかり

大阪 大井 邦子

吹き降りに突つ支ひ付け足し柿の枝  
神無月弥山を仰ぐ竜の松  
岬の堂大西風ゆらす乳房絵馬  
芒野に紛れて子らはかくれんぼ  
説法の時に大声天高し

東京 大川富美子

袋菓子児は捧げ持ち地藏盆  
小鳥来て歩みはじめし稚の靴  
子の手よりぬつと顔出す稲子かな  
微笑みにほほゑみかへす空高し  
いびつなるゆゑの愛しき花梨の実

香川 大空純子

天高し進路のゴール見えぬまま  
運動会君と最後のダンス組む  
かさぶたの訳話しだす長き夜  
催しの談義始まる今年酒  
文化の日選者十八番のじょうさ節

兵庫 岡 有志

混沌の世に逆らはず木の葉髪  
神の旅急ぐは雲を乗り換へて  
イザヤ書の鶴の章まで読む夜長  
かいつぶり十数ふ間も水くぐる  
ぷちぷちと櫛の実踏みて往診す

埼玉 岡田 章子

秋潮の濃淡の縞長崎鼻  
秋の浪鬼の洗濯岩洗ふ  
硫気吐く白根山の裾の花野かな  
霧流る樺林を抜け露天風呂  
青池はゼリーのごとし黄葉載せ

大阪 岡本 幸枝

白といふ気の張る袷にて祝ふ  
あの時の「あっちゃん」に会ふ秋扇  
大きめの箔浮かばせて温め酒  
満月の帰路はゆつくりペダル踏む  
新涼の阿波の國から和三盆

大阪 奥田 妙子

沖島は紫苑盛りの径ばかり  
菊日和列なす島の佃煮屋  
蓮如記を語る坊守萩日和  
落武者の軒寄せ合ひて秋海棠  
大根蒔く沖島の土黒々と

兵庫 勝野 薫

生花展先づ千生りの信濃柿  
金泉や長湯疲れの月の庭  
薄日射す茶室に萩と師の一句  
岩沙<sup>いざしん</sup>参塩釉薬の壺に挿す  
目の会ひて微かな躊躇穴惑

兵庫 加藤 奈那

もらひ来し虫が昼夜を鳴き通す  
さんま焼くぼうと火のつく箸叩き  
無花果の熟れを待たずに引越せり  
穴まどひ去年もここで見たやうな  
いくたびも返す山びこ運動会

兵庫 金田美恵子

謂れ説く禰宜は饒舌息白し  
降神を司る祢宜の声冴ゆる  
払はざる頭より被りし灰神楽  
とんど餅手提げの底に納めたる  
とんど火の芯引き倒す消防士

# 薬草歳時記

(一六四) ヤブコウジ (藪柑子)

須賀悦子

藪柑子もさびしがりやの実がぼつちり 種田山頭火

秋から冬に赤い実をつけ草のように見えるが常緑の小低木。中国、台湾、朝鮮半島、北海道から九州まで分布し、山地の木蔭や藪の中に自生する。

藪柑子は「万両」「千両」「百両金」に比べ実が少ないので「十両」とも呼ばれているが、正月には縁起物として「一年中金運に恵まれますように」と鉢に寄せ植え等にし飾りに使われている。ちなみに、この万両、千両、百両、十両のほかに一両(アカモノ)アリドオシというアカネ科の植物を加えると、一年間お金が「あり通し」になるといふ古人の言葉遊びもあり、古く万葉集に五首、王朝時代にも「山橘」「藪橘」「赤玉の木」の名で多く詠まれている。

枕草子 四十「山橘 山梨の木 云々」

源氏物語浮舟の巻「つれづれなりける人のしわざと見えたり。またぶりに、山たち花作りて、貫き添へたる枝に、云々」

万葉集 卷十九 大伴家持

この雪の消残る時にいざ行かな

山橘の実の照るも見む

積雪の中ちらりと見える赤い実の趣に心を寄せた歌や俳句が多く、この実と葉の形が柑子(みかん)に似ているところから「藪柑子」と名付けられたようだ。

薬用部分は根(紫金牛)。この成分のベンゾキノン誘導体のラバノン<sup>シキキニン</sup>は回虫、糸虫に強力な殺虫力を持ち、また鎮咳、消炎、解毒作用があるので、消化不良、膀胱炎、腫れ物、咳などに有効であると牧野薬草図鑑にある。夏から秋頃にかけ根を掘り上げ、水洗い後日干しにして保存する。大塚敬節先生の「漢方と民間薬百科」によるとこの藪柑子の根とヘビイチゴの根それぞれ五グラムに甘草二グラムを加えて一日分とし煎じて飲むと、尿が出るときに痛み血の混じるような膀胱尿道炎に効があり、又、この根だけを煎じて飲むと胃を丈夫にするという。

古来よりこの可憐な赤い実を愛で新年の飾り物として親しまれていた藪柑子にこのような薬効があるとは驚きである。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

「漢方と民間薬百科」大塚敬節著主婦の友

著者略歴 神戸薬科大学卒

ヤブコウジ (ヤマタチバナ) [ヤブコウジ属] (やぶこうじ科) 藪柑子

*Ardisia japonica* (Thunb.) Blume

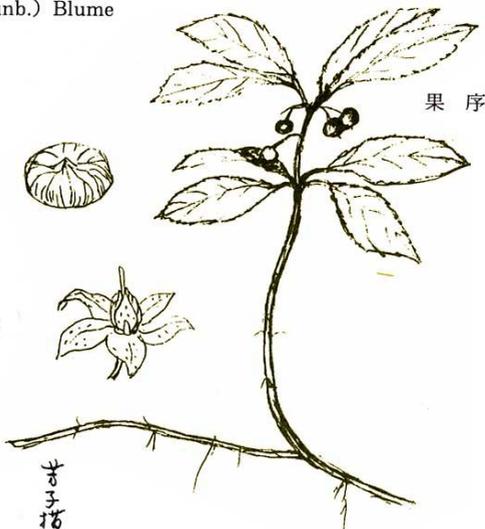
中田  
芳子  
画

薬用部分：根

種子



花



果序

樹のうろの藪柑子にも実のひとつ

飯田 蛇笏

藪柑子かかる里輪に眼鏡橋

中村草田男

藪柑子山めく庭の隅々に

長谷川かな女

富士見ゆや小松の崖の藪柑子

渡辺 水巴

藪柑子父はみるみる後ろなり

八木林之助

冬青き苔の小庭や藪柑子

巖谷 小波

雪すこしとけて珊瑚か藪柑子

及川 貞

匂を作る一と日のいとま藪柑子

加倉井秋を

子の帰り待ちわぶ谿の藪柑子

福田甲子雄

竹藪が住処となりし藪柑子

武智 恭子

(くろっけ)

# 鈴の奏

品川鈴子選

樹の精が糸電話にす烏瓜 岡山 岡 敏恵

諳ずる論語に拍手敬老日

気圧されて空に止まりし赤蜻蛉

一對の楷台風を鷲掴み

長短を決め兼ねて居り秋簾 兵庫 後藤 洋子

亡き姉を真似て試作の諸蔓煮

船頭の高い棹行く葎と蘆

秋高し幼な野球のユニフォーム 兵庫 岩崎可代子

すだく虫楽土足らぬか早仕舞

秋暑し馬車風紋を踏み散らす

七度の転勤も経て草の絮

式部の実卒寿の母は漢詩好き 兵庫 土屋 利之

手話入れて大き口開け歌ふ秋

秋暑し資料であおぐ五分前

子午塔に皆既月食見納めす

銅像のめがねに憩ふ秋あかね 兵庫 栗栖八重子

微睡まじろみに音なき雨や花八手

明るさは稲架の解かれて芝居小屋

近江富士日は影となり蘆の風

賤ヶ嶽真昼の鐘や秋の風

長き夜の遠くに硝子割れる音 香川 石川 裕美

尻痛し屋根の上にて月見酒

尺八の音程外れ秋の暮

虫籠にはなればなれの雄と雌 愛媛 沖 則文

青桐の天突く一枝切り落とす

踏み石の揚羽の片羽拾い上ぐ

招かれる立場になりし敬老日

役終えて山田の隅に案山子塚 兵庫 太田 實

盆梅を焚きし古武士よ夕吹雪

二連銃下山の父に温め酒

寒菊の傾しぎて朱を見せにけり

新雪や五体投地の僧の真似 兵庫 磯田せい子

朝顔の紺すこやかに赤児泣く

萩咲いて貧を樂しむ勝手口

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 小林 玲子 〃

\*選句は全て 品川鈴子

樹の精が糸電話にす鳥瓜

岡 敏恵

有馬朗人氏によれば、自然現象一般に靈魂が宿っていると感じ、人格的に扱ふ觀念「アニミズム」は、俳句にも当てはまるとのこと。離れた樹まで蔓を伸ばしてぶら下がる鳥瓜は樹が掛けた糸電話、仲良しの樹々はどんな話を交わすのやら。まるで童話メルヘンの世界。

長短を決め兼ねて居り秋簾

後藤 洋子

秋になつても残暑の厳しさに簾が外せない。異常な気象だが暦にも忠実な自然界の移ろい、今後日脚の傾き加減が解らず、簾の丈に戸惑う始末。

七度の転勤も経て草の絮

岩崎可代子

停年を迎えた伴侶と共に、振り返れば七回もの転勤を乗

り越えて、無事に勤めを果たした。その経験は生活の知恵となり、これからは自由を楽しむ時期。草の絮を見習って、意のままにゆつたりと過ごしましょう。

秋暑し資料であおぐ五分前

土屋 利之

昨秋は異常気象で、いつ迄も暑い日が続きました。ほどなく始まる会議か講演を待つ間、昂りと会場の人いきれが相俟つて暑い。つい手元の資料を扇子がわりに使った。「五分前」と言い切つて新鮮。緊張と期待がこちらにも伝わってきます。

明るさは稲架の解かれて芝居小屋

栗栖八重子

昨秋吟行の道すがら、コンバインが稲を刈り進む後から、脱穀された籾の袋詰めが次々に出てくる光景に出合った。この句では稲架に懸け天日干しされた新米だから、きつと美味でしょう。

農作業の一段落した豊作の村に、芝居小屋が建った。稲架もかたづけられ、秋天に演目や役者の名前を派手に染め抜いた幟も立ち、村中がうきうきと弾む。扱今日の演目は？

長き夜の遠くに硝子割れる音

石川 裕美

やんちゃ盛りの子供も寝かし付け、やっと静かな自分だけの時間になった。と、ふと遠くで硝子の割れる音が…すわ、事件か事故か、はた又夫婦喧嘩？ 残忍な犯罪が日常化している昨今、次の気配を待つ。ミステリアスな場面を俳句に持ち込み、後は読む人に様様に想像させる、心憎い手法。

踏み石の揚羽の片羽拾い上ぐ

沖則 文

庭の踏み石に、美しい色彩の揚羽蝶の片羽だけが落ちていた。日常生活の何気無い動作が揚羽蝶の片羽で一編の詩になった。

新雪や五体投地の僧の真似

太田 實

尊者や仏像等を両膝、両肘、額を地につけて拝する事を五体投地とよぶ。

雪国に住む人達には、降り積もる雪は厄介な代物だけれど、私達にはメルヘンチックでこの齡になっても雪の予報が出るわくわくして夜中何度も外を窺う。積もった雪に転べば四次元の世界に行けそうな気分になってしまふ。

その転ぶ様を五体投地の形と捉えた。発想の飛躍がおもしろい。

背伸びして鏡に映るレモン買う

磯田せい子

スーパーマーケットの野菜や果物の陳列台は奥が鏡になっていて店が多い。

取り易い手前からではなく、背伸びしてまで奥のレモンを選んだ。何故？ 鏡の中のレモンが瑞瑞しく輝いて見えたから…恥ずかし乍ら深読みをして、手前に置かれた品は古い物がよくあるから…。(以下略)